

# 収穫は、遅れずに！

長岡農業普及指導センター  
稲作情報 No.8

～高温登熟による品質低下の回避を！～

電話 0258-38-2554

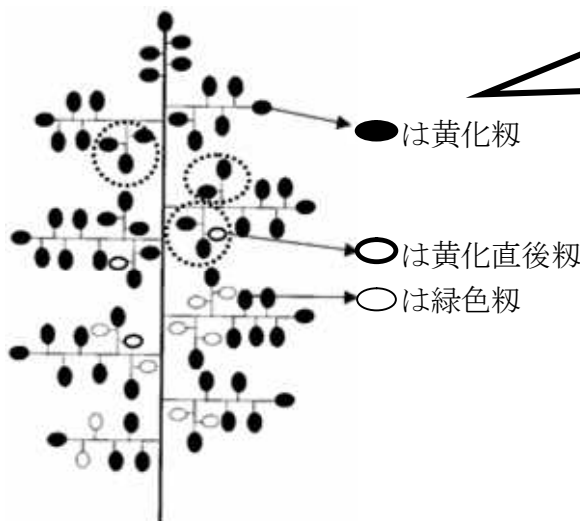
E-mail ngt111440@pref.niigata.lg.jp

今年は出穂期後が高温となり、さらに10月初めまで高温予想（9/1発表 1か月予報）であることから、基部未熟粒・胴割粒等の発生が懸念されます。

- 特に、中生品種は、早生品種以上に登熟初期（出穂後10日間）の最高気温が高く推移したため胴割粒の発生が懸念され、今後の天候によって、さらに発生拡大が推測されます。  
→ 登熟状況・天候を考慮し、刈遅れないよう計画的な刈取作業の実施を！

## 1 収穫直前の高温では、やや早めに収穫検討！

### (1) 黄化粳割合を確認し、適期に収穫



収穫直前に高温・乾燥が続く場合、  
● 点線囲みの2次枝梗に青みが残る程度の、やや早めの収穫（黄化粳80%）を検討！

通常年は、

【黄化粳85～90%の判定方法】

- ・ 収穫作業は、必ずほ場ごとに粳の黄化状況を確認する。
- ・ 図中の点線内（上位3～4本目の1次枝梗に着生する2次枝梗粳の黄化で判定）の黄化した頃が収穫適期。

図1 収穫適期の黄化粳の状況

（H8富山県農試「粳黄化の状況と刈り取り時期」より抜粋・コシヒカリ）

### (2) 出穂期からの積算気温を参考に収穫準備

表 品種別出穂期と収穫適期の予想

（※高温登熟年として積算気温を50℃早めている）

品種名	出穂期(出穂期の幅)	積算気温	収穫適期のめやす
コシヒカリ	8月4日(8/2～6)	950℃(※)	9月10日(9/8～12)
新之助	8月10日(8/8～12)	1,050～1,100℃	9月22～24日(9/20～27)

- ・ 8月24日までの気温は本年値(長岡アメダスデータ)、8月25日以降は気象庁「向こう2週間・1か月の予測資料」に基づいて算出。
- ・ 積算気温表は普及指導センターホームページに最新情報を掲載します。

(<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/fukyu-top/>)

- 出穂後の高温により胴割粒の発生が懸念され、今後、台風によるフェーン風に遭遇すると、さらに胴割粒が増加するため刈遅れないよう収穫作業を行う。
- ほ場で胴割粒が想定される場合は、通常より早めの収穫を検討・実施する。

## 2 適正な乾燥・調製で品質低下を回避（ゆっくり乾燥）

### （1）適正な乾燥作業で胴割粒の発生防止

- ア 出穂初期が高温であったことから、胴割粒の発生素地ができてしていると想定されるため、張り込み直後は通風乾燥とし、徐々に加温（夜間等、気温が下がったら）に移行する。
  - 籾水分が低下している場合及び、降雨後の籾水分が高い場合でも、細心の注意を払い乾燥作業を行う。
- イ フェーン時など、収穫直後（乾燥機張り込み時）の籾水分が既に18%程度まで低下している場合は、水分のばらつきが大きく、乾燥中に胴割粒の発生が助長する危険があるため、軽く通風循環した後、半日程度貯留して水分ムラを解消してから加熱乾燥する。

### （2）1.9 mm以上のふるい目や色彩選別機の活用

未熟粒や着色粒などが多い場合は、調製時の流量を少なくする。また、必要に応じて1.9mm以上のふるい目や色彩選別機で調製し、整粒歩合を高めて1等級の品位に仕上げる。

## 3 稲わらの秋すき込みで土づくり

- （1）稲わらの秋すき込みは、堆肥施用と同等の土づくり効果が期待できる。
- （2）稲わらは、地温の高い10月中旬までにすき込みを行い、土壤微生物による分解を促す。稲わらと土壤を混和するため、5～10 cm程度に浅く耕うんする。
- （3）ケイ酸、リン酸が不足しているほ場では、土壤分析・診断に基づいて土づくり資材を施用するとともに、稲わらの秋すき込みを行い、効果的・経済的な土づくりに努める。

## 4 籾がら施用でケイ酸供給

- （1）籾がらはケイ酸を約20%含む有用資源であり、土壤を膨軟化する効果がある。収量540kg/10aのほ場から得られる籾がら（約130kg/10a）をすき込み還元すると、ケイカルを約80～100kg/10a散布したのと同様の効果が期待できる。
- （2）施用量は「各ほ場から得られた籾がらの量」を基本とする。
- （3）ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の籾がらは伝染源となる可能性があるため施用しない。また、雑草種子が多量に混入したものも施用しない。